

小学校英語教員の教育実践力育成のための試案

A Tentative Plan for Developing Teacher's Practical Skills in Elementary School English Activities

東 悦 子
Etsuko HIGASHI
(国際教育研究センター)

江利川 春 雄
Haruo ERIKAWA
(教育学部)

辻 伸 幸
Nobuyuki TSUJI
(附属小学校)

磯 辺 ゆかり
Yukari ISOBE
(和歌山大学非常勤講師)

2007年10月5日受理

Abstract

This paper examines fundamental issues that arise in implementation of elementary school English activities. Reflecting historical background in Japan and the current circumstances in East Asia, tentative proposals for instructional methods and materials are discussed. A prototype of class design has developed for children especially in the lower classes at an elementary school with adequate consideration for marked features in each developmental stage of children. Through practical experience of teaching English to school-aged children, two major factors are suggested in devising a curriculum for elementary school English activities.

The study also refers to the importance of partnership between elementary schools and junior high schools and of interactive in-service training for teachers involved in English instruction at elementary schools.

1. はじめに

2002年度から小学校3年生以上の総合的な学習の時間の中に、国際理解教育の一環として「外国語会話等」を取り入れてもよいとする方針が盛り込まれた。こうして、2006年度には全国の95.8%に及ぶ公立小学校で何らかの英語活動を実施している。

また、2007年8月には中央教育審議会小学校部会が、小学校5・6年生の英語を週1コマ程度必修化すべきであるとの方針を打ち出した。これには賛否両論あるが、いずれにせよ、小学校での英語教育に関して、その教材、教授法、教員養成等に関する検討作業を急がなければならない。

そうした問題意識の下に、筆者らは「平成17-18年度和歌山大学オンリー・ワン創成プロジェクト」の一環として「小学校英語スモールプロジェクト」を組織し、研究と実践を進めてきた。小論はその成果の一部である。

2. 日本と東アジア諸国における小学校英語教育の歴史と現状

2.1 日本における小学校英語教育の歴史

江利川(2006)が詳細に実証しているように、日本の小学校における英語科教育は明治初期に始まり、その本格的な実践は高等小学校が制度的に確立した1886(明治19)年度より6・3制に移行する1946(昭和21)年度までの60年間以上に及んでいた。それは太平洋戦争下でもほとんど途切れることはなかった。教科としての位置づけは開設自在な加設科目であり、随意科目だった時期が大半であった。そのため、その時代時代の教育政策の影響を直接的に被った。また、地域の状況により加設が左右されたために、一般に商工業が発展している地域ほど加設率が高いなど、地域の経済構造と住民の教育要求とを反映しやすい教科であった。

明治末期には小学校での英語教育の開始年齢、教授法、教材、中学校との整合性、教員養成などに関し、さまざまな批判や提言がなされていた。公立小学校での英語教育のあり方が模索されている今日に通用する諸問題が、すでに検討されていた。

1908(明治41)年の義務教育6年制への移行に伴って、高等小学校が袋小路的な完成教育機関になると、英語教育は商業科に組み込まれて実業主義が強められ、その正常な発展は政策的に阻害された。しかし教育現場からの根強い反発にさらされ、英語科は1919(大正8)

年度に独立の教科として復活した。その後は急速に加設率を盛り返し、アジア太平洋戦争の時期には国粋主義の風潮の中で加設率の低下傾向を示したものの、昭和戦前期には概ね全国の1割程度の高等小学校で英語が教えられ続けた。

和歌山県師範学校附属小学校では、石口儀太郎(1900-1970)が中心となって、1924(大正13)年10月より、尋常科の1年生と2年生174人を対象に英語教育を実践した。ネイティブ・スピーカーと日本人教師のチーム・ティーチングで、週3回30分ずつ英語を教えたのである。石口は同校に在任中の1926(大正15)年6月に自らの実践を集大成した大著『新尋一教育の実際』を刊行している。公立の尋常科で、しかも1年生から英語の授業を実践した例は全国に例がなく、小学校英語教育史のなかで特筆すべき活動である(詳細は東・江利川2005参照)。

1941(昭和16)年度からの国民学校期にも、発足時から国定の小学校用英語教科書が用意されていた。

こうした経緯を経て、高等小学校の英語学習人口は1940(昭和15)年ごろには30万人前後に達しており、同一年齢の中学生19万人を上回るまでに成長していたと考えられる。

高等小学校は現在の小学校よりもむしろ中学校に似た性格をもっているため、そこから得られる教訓を現在の小学校に機械的に当てはめることはできない。しかし、教材、教授法、教員養成などの面での様々な遺産は、今ふたたび吟味されるべき価値をふんだんに含んでいる。

2.2 東アジアにおける小学校英語教育の現状

筆者らは韓国、台湾についても研究したが、すでにHo Wah Kam & Ruth Y.L. Wong(2004)、河合忠仁(2004)、河添恵子(2005)、大谷泰照ほか(2004)などの先行研究もあるので、ここでは紙幅の関係で中国における小学校英語教育の現状を概観するに留める。

中国では現在、英語は小学3年から導入され、高級中学(日本の高校)修了まで必修教科として教えられている。北京市などでは、2003年度から小学1年生から英語が導入されている。時数は週3~4時間程度が多いようである。

英語の授業形態は、ペアワークや口頭活動中心である。また、発音指導では中国語の発音表記法である拼音(ピンイン)を活用しているため、児童は英語の発音を抵抗なく学ぶことができる。中国の英語教育の最近の特徴は以下の5点である。

- (1)教師は英語のみを使う(小学校から大学までこのスタイル)。
- (2)授業は「聞く」「話す(暗唱も含む)」ことに重点を置いている。
- (3)英語のみで書かれた教科書を使用する例が多い。

(4)英単語は頻繁にテストをすることで定着を図る。

(5)機材(LL教室、コンピュータおよびソフトウェア、OHP)を活用する。

中国では、小学校・初等中学・高級中学で一貫した目標設定がされており、それに対応した教科書の構成になっている。教科書には漫画、歌、ゲームなどがふんだんに配置されているが、週1時間程度と見込まれる日本の小学校で学習するには多すぎる。また、中国の教科書に登場する国は中国、イギリス、アメリカのみで、異文化理解の観点からは偏っている。日本の小学校では国際理解教育としての英語活動を行っており、多文化主義的な教材が望まれる。

このように、中国などから学びつつも、日本独自のカリキュラムや教材開発が必要であろう。少ない授業時間や練度の低い教員への対応、中学校との連携と一貫したカリキュラムの検討、これまで通り国際理解教育に力を入れるのか、スキル面をより重視するのかの検討なども、今後の重要課題である。

3. 小学校英語指導法の現状把握と開発

3.1 小学校英語指導方法について

小学校英語において適切な指導法を確立していくことは、緊急の課題である。なぜならば、不適切な指導は、多くの「英語嫌い」を中学校入学前に生み出しかねないからである。

和歌山大学教育学部附属小学校では、1年生から6年生まで、ALTと担任のチーム・ティーチングによる英語活動を週に1時間程度実施している。指導はALTに強く依存した形で行われている。そこで、ALTに依存しない担任単独による英語活動の授業研究を平成18年度に実施してきた。附属小学校の教育研究発表が平成18年10月に開催され、和歌山大学国際教育研究センターの東悦子准教授の指導助言を得て公開研究授業と研究協議会をもった。それらから、次のような指導方法や学習内容の重要性が明確になってきた。

- (1)児童の発達段階に合致させる
- (2)児童に興味をもたせる
- (3)児童の負担が少ない
- (4)コミュニケーション活動につながる

以上の指導方法や学習内容の条件を加味する授業のプロトタイプができれば、全国の小学校教員にとって負担が少なく英語活動を実践していくことが可能と考えられる。

3.2 小学校低学年での授業展開のプロトタイプ

小学校英語指導方法で大切になってくるのが、1時間の授業のプロトタイプを確立することである。今回の研究から小学校低学年に適用可能なプロトタイプ(図1)を開発した。

「係のあいさつ」や「ウォームアップ」は、児童たちの心理的不安を軽減する働きがあった。係のあいさつに続いて、テンポよくこのウォームアップを行うと、児童たちは抵抗なく英語活動に積極的に参加することができる。

「慣れる」活動は、児童が次の段階であるコミュニケーション活動に移るためになくはならないものである。中学校で多用されてきた教師の発声に続けて機械的に単語や表現を繰り返す指導方法が小学校でも見られるが、これは、児童の興味関心を低めかねない指導方法である。そうならないためにチャンツを有効利用して、児童の興味関心を高めつつ、本時に使う単語や表現を練習する段階である。

「伝える」活動は、コミュニケーション活動を組み入れる場面である。例えば、「慣れる」の場面で練習した表現を使って、インタビューゲームを児童同士で行うことなどが考えられる。ここで、児童たちは、擬似的ではあるが、英語でのコミュニケーションを体験することができる。また、コミュニケーション活動としてインタビューゲームなどを用いることで、伝え合う喜びを感じとらせることもできる。

「振り返り」は、評価に関わる重要な段階である。児童たちが本時の授業を振り返り、自己評価を行う。どの程度それぞれの活動に取り組めたのかを3段階の評価で自己判定し、自由記述で自分や友だちの活動の良かった点を記すことなどが可能である。このような評価を年間を通して行えば、ポートフォリオとして活用することも可能である。また、指導者側の評価としても活用することができる。

【係のあいさつ】

英語係が前に出て、掛け声をかける。

“Let’s enjoy English! — OK.”

“Let’s sing a song.”など子どもたちの英語で授業を始める。

【ウォームアップ】

本時の学習活動に関連する英語の歌を楽しむ。

【慣れる】

本時の学習活動で扱う単語や表現にチャンツを通して慣れる。

【伝える】

本時の表現を使ってコミュニケーション活動を行う。

【振り返り】

今日の活動について振り返る。

図1 小学校低学年の英語活動プロトタイプ

3.3 低学年における実際の授業の展開例

図1の英語活動プロトタイプを実際に使った実践展開例(図2)をここで紹介する。この授業は、食べ物を

テーマにした授業「何がほしいの？」で、2年生を対象に行ったものであり、辻(2007)の内容をもとに加筆したものである。

【係のあいさつ】

・英語係が前に出て、掛け声をかける。

“Let’s enjoy English! — OK.”

“Let’s sing a song.”

“Hello.”を歌う。

【ウォームアップ】

・“Acca bacca soda cracker”を歌う。

・“Hot cross buns”の手遊び歌をする。

・“Ten fat sausages”を歌いながら動作化する。

【慣れる】

・チャンツで本時のゲームに使う単語と文を練習する。

“What do you want ?”

“I want ~.”

spaghetti, beef, chicken,

sushi, pizza, ramen

【伝える】

・食べ物カードを使って“What do you want ?”ゲームを行う。

・インタビューゲームを行う。

【振り返り】

・今日の活動について、ふりかえりシートに自己評価を記入する。

図2 授業展開例(低学年)

【係のあいさつ】

英語の授業の始まりは、英語係の子どもたちが元気に“Let’s enjoy English!”とみんなに呼びかけることからスタートする。その呼びかけに対して、全員で“OK.”と答え、“Hello”の歌を歌った。

【ウォームアップ】

ウォームアップは、子どもたちの英語の活動エンジンを暖めるようなものである。係のあいさつに続いて、テンポよくこのウォームアップを行うと、すっかり英語モードに切り替わる。この授業では食べ物をテーマにしていたので、低学年の子どもがとても元気に楽しく歌える“Acca bacca soda cracker”, “Hot cross buns”, “Ten fat sausages”の3曲を歌った。

これらは、どれも身体表現を歌に合わせて行うことができるので、低学年の児童には適した教材である。

【慣れる】

英語を楽しむことができる雰囲気づくりができた後、本時の授業で使う“What do you want?”, “I want ~.”の文や食べ物の単語をチャンツで慣れ親しませた。

電子音楽キーボードに内蔵されているリズムに合わせて教師の発声を模倣させるのである。本時では、16ビートのリズムを使用した。

【伝える】

実際に子どもが、慣れ親しんできている表現や単語をゲーム活動で使用した。

本時の一つめのゲーム(図3)では、絵カードを使用した。一人6枚の絵カードを配布した。カードには、spaghetti, beef, sushi, chicken, pizza, ramenの画像と英語の綴りが貼られている。画像は視覚で理解できるので、英語の授業には欠かせない教材である。このゲームでは、子どもたちが最初に6枚の絵カードを持ち教室を自由に移動して、相手を見つけ英語でじゃんけんをする。敗者は、勝者に“What do you want?”と尋ねる。勝者は、自分の欲しいカードを考え“I want spaghetti.”のように答える。もし敗者がそのカードを持っていれば、それを渡し、なければ“No.”と言って別れる。このようにして、たくさんの友だちとカードを取り合うのである。

もう一つのゲームは、インタビューゲーム(図4)である。インタビューシート(図5)を用いて、友だちに“What do you want”と尋ね、尋ねられた方は自分の食べたい食べ物をシートの中から選び答え合う活動である。答えを言った人の名前をそのシートの欄に書き込んでいく。最後に“What is the most popular food in this class?”と教師が尋ね、子どもたちは人気のあった食べ物を発表した。



図3 食べ物カードゲーム



図4 インタビューゲーム

【振り返り】

活動の評価の一つとして、自己評価を振り返りシート(図6)に記入させた。それぞれの活動ごとに楽しさの度合いに合う顔の表情に色を塗るものと、その日の活動で自分の一番よかったところを自由記述するものを取りませた。

3.4 成果と課題

今回の研究から、小学校英語活動としてのプロトタイプ低学年版を開発することができた。このプロトタイプを使えば、児童たちはスムーズに英語に慣れ、親しむことが可能となる。今後、小学校で英語活動を指導する上で、担任の負担を少しでも軽減していくことにつながるものである。







What do you want ?	
NAME	
	ramen
	pizza
	chicken
	sushi
	beef
	spaghetti

図5 インタビューシート

ふりかえりシート	
ふりかえりのポイント	ふんばりぐあい
   "Aaaa! These soft crackers" "Hot Cross Buns" "Ten for sausages" 楽しく歌ったり、歌をうごかせた。	  
 What do you want ? [want -] チャンツでは大きな声でえい勝がいた。	  
 What do you want ? [want -] 食べ物カードゲームをたくさんのおだちとすることができた。	  
 What do you want ? [want -] インタビューゲームでたくさんのおだちに聞くことができた。	  
【じぶんの一番よかったところ】	

図6 ふりかえりシート

本プロトタイプを中心に2006年度、筆者が英語活動の授業を実践してきた2年生の学級の児童を対象に、

英語の授業が好きかどうかを5段階尺度で尋ねた。そのアンケート結果が(図7)である。

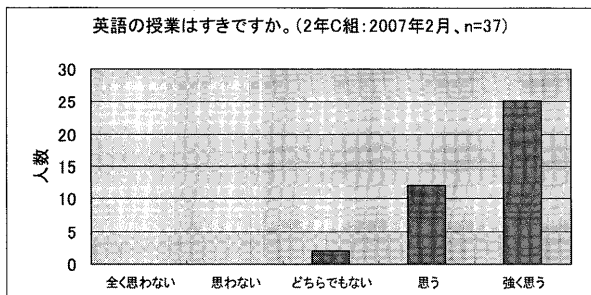


図7 英語の授業に対する学級児童の意識

この結果から、95%もの児童が英語活動の授業に対して肯定的であることが分かる。しかも、誰一人として英語活動を否定的に捉えていない。英語活動の目標が、英語スキルの習得ではなく、関心や意欲、態度であることから考えても、本プロトタイプの有効性が示されたのではないかと判断できる。

今後の課題として、本プロトタイプを使った授業の実践事例を増やして、さらに改善していく必要がある。また、高学年でもこのプロトタイプを使用して指導を行うことも可能ではあるが、さらに発達段階を考慮した指導方法や学習内容を加味したものを開発してゆかなくてはならない。

4. 小学校英語教育カリキュラムの研究

4.1 発達段階に応じた小学校英語教育カリキュラムの開発

小学校における英語教育を考える際、まずその多様性を踏まえておかねばならない。例えば、すでに教科としての英語学習に取り組んでいる学校もあれば、総合的な学習の時間における英会話などの英語活動、あるいは国際理解教育の一環としての英語活動に取り組んでいる学校もある。ここでは、英会話などの英語活動という点に視点をおいて、発達段階に応じた小学校英語教育カリキュラムとは、どのようなものかを考えたい。

児童期における子どもの成長は著しい。そのような発達段階にある子どもの特性をいかに言語教育に活かせるかということが、小学校英語教育カリキュラムを開発する際に第一に重要なポイントとなる。すなわち、発達段階によって異なる興味・関心や言語への敏感さをいかにカリキュラムに反映させるかということである。

東(1999)は自己の児童英語講師としての経験から、発達段階によって、より効果的に学習できる英語の技能(聞く、話す、読む、書く)が異なることを実感し、児童英語講師にアンケートを実施した。結果として、発音、リズム、イントネーション、模倣能力ともに年齢の要因が有意であり、英語講師らは、学年が低いほ

ど音声に敏感で、英語の音を聞こえるままに模倣できると評価した。他方、文字を手がかりに、英語を読んで覚えようとする傾向や文字に興味を示すという点でも、評価に有意な差がみられ、学年が高くなるほどに英語の文字への興味が増しているという結果を得た。以上は一例であるが、このような特性を活かし、英語の音に親しむことのできる段階である低学年では、英語の歌やチャンツなどを豊富に取り入れることが有効で、理屈抜きに英語の音やリズムに触れること自体が効果的であろう。一方、高学年の児童も低学年からの積み上げがある場合は、比較的英語の歌なども口ずさむようであるが、高学年から開始した場合、歌を歌うこと自体に照れくささを覚える児童も多く、歌うことを強要することは英語嫌いのきっかけを作りかねない。しかしながら、歌を聞くことから始めて、ゲーム的にキーワードを聞きとるなどの工夫をすることによって、リスニング面での指導も可能となるであろう。また、文字への興味という点から、文字を教え込むのではなく、フォニックスを用いて、音声と文字の結びつきのルールをリズムに合わせて学ぶことや、絵カードに文字が加えられるなどの工夫により、文字を目にする機会を与えることは自然なことであろう。また自分の名前をローマ字でサインできること、バースデーカードやクリスマスカードなどの作成を通して、挨拶の定型表現を模写することなど、活動の目的に沿って、文字への関心を引き出すことは可能である。

第二に重要なポイントとして、カリキュラムは、低学年、中学年、高学年と螺旋階段を登るように積み上げてゆくことが望まれる。例えば、到達目標Xがあるとすると、1年生の学習項目X1があり、それが2年生ではX2、同様にX3…X6となり、到達目標Xが達成されるのである。簡単な学習ゲームで例を挙げよう。0および1から10までの英語を学び、ビンゴゲームを行なう。低学年では、数字がランダムに書き込まれたビンゴシートを使用して、教師が発音する数字に印をつける。中学年では、児童が袋に入った数字のカードを引いて、その数を児童自らが英語で発音することで進行する。高学年では、教師が英語でクイズをだして、その数を推測して発音する。クイズは、“How many legs does a snake have?”などのように、ユーモラスであり、英語を聞きとり意味を理解しなければならないものを利用する。クラス全体で質問を考えながら、教師とのやり取りの中で、“snake”や“How many legs”などのキーワードからzeroの答えを引き出すのである。数字の学習やビンゴのような簡単な学習ゲームも、児童の発達段階と学習段階に応じて、バリエーションを与えることで、螺旋階段のように繰り返しながら段階を高めてゆけるのである。

具体的な年間カリキュラムの提案は今後の課題とするが、現状において、学校独自のカリキュラムを完成

させている小学校もあれば、出版社や英会話学校などが小学校にカリキュラムを提供している場合もある。学校単位でカリキュラムを開発する労力、業者に依頼する場合にかかる費用などの負担は軽くはないであろう。また中学校との連携を円滑に進める点においても、少なくとも同一中学校へ進学する小学校校区という地域単位で、カリキュラムの統一がはかれれば、受け入れる中学校での英語学習開始時の生徒の学習背景の相違による困難さは軽減されると思われる。

4.2 中学校との連携

先に述べたが、様々な形態で英語活動が進んでいる現状においてこそ、小学校と中学校との強い連携が必要であるだろう。中学校での英語学習開始時において、学習背景が多様な生徒を適切に指導するために、中学校の英語教員は小学校の英語活動について十分知っておく必要がある。小学校の英語活動担当教員も同様である。中学校では何をどのように学習しているのかを知ることは、中学校の前倒し的な学習でなく、小学校だからこそ効果的な学習を組み立てる際の参考になる。加えて、中学校英語教員の指導方法を知ることやALTとのティーム・ティーチングの様子を観察することも有効であろう。このような同一校区の小学校と中学校相互の授業観察やお互いの取り組みについての検討会などの交流が、将来的には英語教育を小学校、中学校という9年間の枠組みで捉えてゆくためのスタートとなるだろう。

小中連携の具体例の1つとして、小学校段階で児童が何をどのように学んだかという記録を申し送ることが挙げられる。これにより、中学校英語担当教員は、英語活動を通して児童が既に身につけた音声言語から文字言語の学習へと発展させることが容易になり、児童の多様な英語学習の背景を把握し、教室活動を効果的に進める工夫ができると考えられる。すなわち、生徒が既に知っている英語表現、“Do you like (play, want) ~?”などを新出教材として導入する必要はなく、口頭練習からはじめ、「読む」「書く」活動に一層の時間をかけることが可能である。また、学習背景の違いを把握し、既に多くのことを身につけている生徒とそうでない生徒によるグループワークやペアワークを通して、互いに学びあう活動を工夫することもできよう。一方、連携がなされない場合、学習者にとって中学校での英語学習が既に知っていることの退屈な繰り返しになってしまう恐れがある。また、小学校での英語活動の時間が少なかった児童が、不安感や苦手意識を持つかもしれない。

最後に留意したいことは、多忙な中での小中連携であるため、検討会や授業観察などの継続が難しい点である。1回の観察で見えることと見えないことがある。そのことを踏まえて、実際の授業観察が無理であれば、

ビデオや資料による授業情報交換など継続可能な連携を工夫する必要があるだろう。

5. 小学校英語教員養成のためのプログラム研究

5.1 国立大学教員養成系学部における小学校英語教員プログラムの現状

小学校英語活動が本格化する中で、国立大学の教員養成系学部においても、小学校英語教員の養成プログラムを擁する大学が多くなっている。2005年12月時点での実施状況は以下の通りである(愛知教育大学・杉浦正好教授の教示による)。

- (1)小学校課程に英語専攻やコースがある大学
 - 兵庫教育大学：言語系英語4コース(英語教育、英語学、英文学、小学校英語活動)を設置。
 - 上越教育大学：初等教員養成課程の教科領域教育に言語系(国語・英語)として約25人募集。
 - 鳴門教育大学：小学校教育専修の中に、英語科教育コースを設置。
- (2)小学校課程英語専攻開設予定及び検討の大学
 - 東京学芸大学：平成19年度に5名で新設。
 - 大阪教育大学・静岡大学(検討中)
- (3)小学校英語の授業を開講する大学(予定を含む)
 - 福井大学、三重大学、岐阜大学、山梨大学、和歌山大学、奈良教育大学、富山大学
- (4)その他
 - 信州大学：学校教育教員養成課程内に「言語教育」を設置。入学後、「英語教育分野」を選択。

5.2 現職教員研修について

和歌山県下において、小学校英語活動の実施状況は、すでに100%に達している。この数字からも、これからの小学校英語教育を担ってゆく教員養成が急務であるのはいままでもないだろう。加えて、現在小学校英語活動に何らかの形で携わっている教員を対象とした継続的で実践的な研修も必須であろう。

小学校教員で、中学校英語教員の免許を持つ教員はわずか4%である。また中学校英語教員免許を取得するために学んだ知識や指導方法だけでは小学校英語教育の指導において十分であるとは言い難く、児童の発達段階を踏まえた指導方法が求められる。

筆者らは、平成17年、18年と和歌山県下の複数の小学校で英語活動のクラスを観察し、担当教員と話す機会を持つことができた。また、和歌山大学留学生とともに国際理解教育の一環としての英語活動をサポートした。どのような現職教員研修が必要かを考えるにあたり、これらの経験から得た知見をもとに担当教員の取り組み様(タイプ)の概略をまとめると以下のようになる。

〈教員の取り組みタイプ〉

- a. 小学校英語活動における指導方法を身につけ、ALTがいなくとも、教室英語を駆使して授業を進めてゆける。
- b. 英語活動において中心的役割を果たし、アイデアが豊富で、ALTや留学生を活用して、そのアイデアをもとに授業を構成している。英会話が得意でなくとも、教師自身に児童とともに学ぼうという姿勢がみられる。
- c. アイデアはあるが、それを具体化する方法がよくわからない。英語でコミュニケーションを図ることに不安がある。しかし、前向きに取り組もうという姿勢に溢れ、少しサポートがあれば、アイデアを授業として構成することが容易になる。
- d. ALTなどの外国人講師が中心となって活動を進めており、機器の操作や児童への注意など補助的仕事だけを行なっている。現状としては、事前の打ち合わせも難しく、外国人講師から提示される指導案にまかせざるを得ない。

このようにタイプは様々であるが、共通して言えることは、どの教員も個々に授業研究に取り組み、課題を抱えつつ日々研鑽しているということである。課題を投げかけ相談できる場として、またアイデアを共有する場としても、教員研修は必要であろう。そこで、a. から d. の取り組みタイプから必要と考えられる現職教員研修の内容を検討してみる。

〈教員研修に必要とされる内容〉

(1)小学校英語活動の指導方法

学年別の授業の組み立てモデルが示される。またお互いの指導案を検討する機会を持つ。模擬授業を行ない指導力を高めるとともに、歌やチャンツの指導方法や学習ゲームの進め方などを身につける実践的な研修が必要とされる。

(2)英語の運用能力を高める

ここでの運用能力とは、漠然とした4技能の向上ではなく、小学校英語活動の担当教員として、まず必要とされる英語の運用能力のことである。具体的には、教室英語を身につけること、英語による指導案の記述方法やALTとの打ち合わせにおけるコミュニケーションの回り方などについて学び、実際の授業場面で使用できるようになることである。

(3)モデル授業の公開

ビデオなどを活用して、モデル授業の公開を行なう。タイプa. の教員による授業を公開する。あるいは、(1)で提案された指導方法を用いて、研修を受けた教員が授業を実践する。その様子を観察し再び検討する。

(4)言語習得などの理論を知る

実践を支える支柱となるべきものが理論である。言語習得理論、発達心理学、英語教育史、様々な教授法などを学ぶ。理論と実践の両輪によって、教師の自信が高まる。

最後に、研修のあり方について、講師が一方的に講義する形態のみの研修では、実のある研修にならないことを確認しておきたい。参加者全員が課題を持ち寄り、経験を話し合い、解決方法を見出してゆくのである。ある場では、教員Aが課題を提起し、教員Bが助言者となる。また別の場では、教員Bが教員Aから学ぶ。研修講師もその一員と考えられるが、全体のコーディネーターとしての役割が重要となるだろう。

以上述べてきた小学校英語教員研修の開発にあたっては、教員養成系学部のみならず役割が大いに期待されるだろう。他方、小学校の教員が、実際に研修に参加できる時間を確保できる体制を整えることが大きな課題となるであろう。

参考文献

- 江利川春雄(2006)『近代日本の英語科教育史：職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東信堂
- 辻伸幸(2007)「子どもが「英語って楽しいな。」とつぶやける姿を大切に！」影浦攻・小学校英語セミナー委員会『小学校英語セミナー25』明治図書
- 東悦子(1999)「早期英語学習の発達の効果」『中部地区英語教育学会 紀要』第29号 pp.139-146
- 東悦子・江利川春雄(2005)「和歌山師範附属小学校における低学年の英語教育：1920年代における石口儀太郎の実践を中心に」『紀州経済史文化史研究所紀要』第25号 pp.1-23
- Ho Wah Kam & Ruth Y.L. Wong (Ed.) (2004) *English language teaching in East Asia today: changing policies and practices (2nd ed.)*. Singapore: Eastern Universities Press
- 河合忠仁(2004)『韓国の英語教育政策：日本の英語教育政策の問題点を探る』関西大学出版部
- 河添恵子(2005)『アジア英語教育最前線：遅れる日本・進むアジア!』三修社
- 大谷泰照ほか(2004)『世界の外国語教育政策：日本の外国語教育の再構築にむけて』東信堂